岡　島　遺　跡

調査の経過

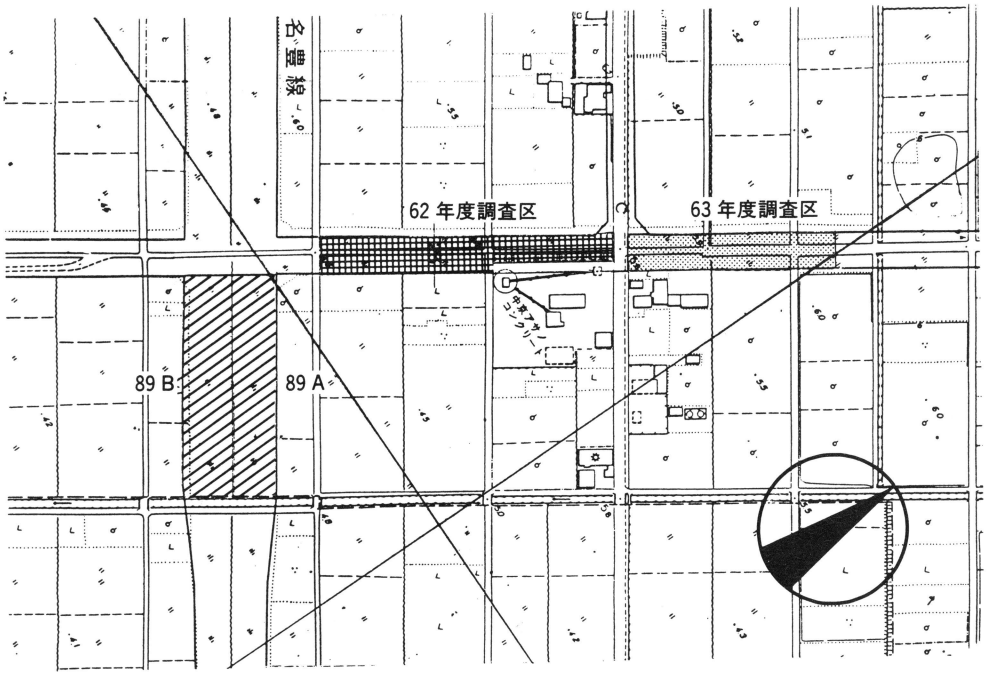
岡島遺跡は、西尾市岡島町・江原町に所在する弥生時代を中心とした遺跡である。遺跡は矢作古川左岸の自然堤防上に立地する。付近を矢作古川のほか広田川などが流れており、これらの河川やその支流が頻繁にその流路を変えて流れ、非常に不安定な地形であったことが想定される。

昭和62・63年度は県道蒲郡・碧南線に伴う調査であったが、今年度は、国道23号岡崎バイパス建設に伴うもので、調査区をＡ・Ｂの２区に分けて実施した。

遺跡の現地表面の標高は約4.5mである。今回の調査では、表面の耕作土を約50cm下げると、その下に厚さ約20cmの古墳時代以降の遺物を含む黒褐色土が堆積する。この下が最初の遺構面（上面）で、標高3.8～4.0mを測る。この上面から20～30cmの間層を経た後、弥生時代中期の遺物包含層が厚さ約50cm堆積する。この下が第二の遺構面（下面）で、標高は3.2～3.4mである。　（山田　基）

調査の概要

今回の調査区は、遺跡範囲の南端部に該当し、遺構は希薄であったが、調査区内に限れ



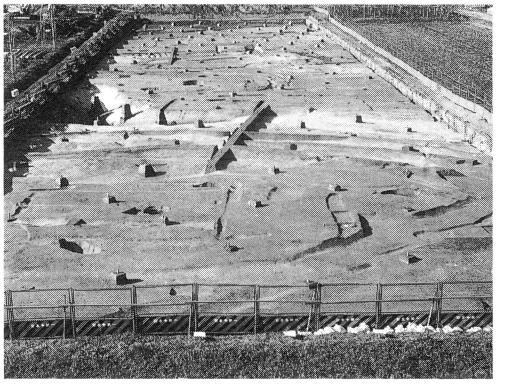
第１図　調査区位置図

ば、西から東に向かって遺構・遺物の密集度が増す傾向が認められた。

以下、上面及び下面の遺構・遺物について、先に調査を終えたA区を中心に述べる。

上面　遺構は、数十条の溝と20数基の土坑を検出した。しかし、これまでの調査と同様に遺物は乏しく、ほとんどの遺構について時期を特定するには至らなかった。ただ、南北方向の溝１条と、自然流路の可能性も考え得る東西方向の溝１条からは、古墳時代前期の土器が出土した。特に後者は、壺と甕との一括出土例として好資料である。

下面　遺構は、方形周溝墓・土器棺墓・溝・土坑及び「土器集積遺構」である。方形周溝墓は数基が確認され、周溝の全形を知り得たものの規模は約12×11.5mで、溝中から弥生中期の壺類を出土した。土器棺墓はA区だけで十数基あり、全てが壺で、ほとんどが正立の状態である。「土器集積遺構」は、自然流路の肩部付近で検出した。断面観察によっても、埋置の状況は確認されず、平坦面に「立て並べられた」ものと推定される。器種構成は、小型壺と脚付壺を中心に「台付鉢」を加えたもので、弥生後期に属する。その他の遺物としては、銅鏃が土坑内から出土した。



A区上面全景（東から）

A区自然流路と溝群

土器集積遺構

まとめ

本年度調査による新知見は、方形周溝墓と土器棺墓群の検出で、これにより弥生中期の当遺跡での「墓域」が推定されるところとなった。また、土器棺墓で、所謂古井式と長床（高蔵）式の壺が蓋と身の関係で組み合わさって出土したことは、土器の編年研究の上で注目された。

（福岡晃彦）